

« L'anaphore, cet obscur objet de recherche »

フランス語の<指示形容詞 CE+名詞句>照応

— 談話における情報と視点 —

東郷雄二

0. はじめに

談話に一度登場した名詞句をさすために用いる言語形式を照応形式と呼ぶ。照応には大きく分けて、ゼロ照応（省略）、代名詞照応、名詞句照応の3つの形式がある。日本語に例を取ると、「田中は今日会社を休んだ。(φ) 風邪を引いたのだ。」（ゼロ照応）、「田中は...彼は...」（代名詞照応）、「田中は...この小心物は...」（名詞句照応）となる。フランス語ではゼロ照応はできないので、代名詞照応と名詞句照応が主な照応の手段となる。

名詞句照応では、照応形式となる名詞句に限定詞が付くが、これには定冠詞 *le / la / les*、指示形容詞 *ce / cette / ces* の2つの系列がある。

(1) Un homme descendit du train. {L'/Cet } homme portait une valise noire.

定冠詞と指示形容詞のどちらも使える場合も多いが、その選択に制約が加わる場合がある。次のような場合がそれである(1)。

(2) Une femme entra dans la pièce. J'avais vu {cette /*la femme } chez mon ami.
(CORBLIN 1983)

(3) Tu verras un garçon et une fille. Tu dois donner une poupée à {la/??cette} fille et une voiture {au/??a ce } garçon. (Ibid.)

(2)では指示形容詞のみが可能であり、(3)では逆に定冠詞しか使えない。CORBLINはこの現象を「即時反復のパラドックス」と呼び、この問題を詳細に論じている。この現象をめぐるのは、KLEIBER(1984)、春木(1986)、井元(1989)、田口(1991)などが相次いで優れた研究を發表しており、フランス語の照応のメカニズムについて様々な新事実が明らかにされている。

しかし、<指示形容詞 CE+名詞句>の照応を実際に書かれたもので観察してみると、上のように直前の名詞句を忠実に反復している例は意外に少ない。「即時反復」に使われる指示形容詞はむしろ例外的なのである。実際のテキストで一番多いのは、先行する談話の内容を一語で要約する形で <CE+名詞句> で受けるといふものである (2)。

(4) L'ONU a décrété l'embargo contre l'Irak. *Cette décision...*

「即時反復のパラドックス」はそれ自体解明を要する問題ではあるが、<ce+名詞句>による照応の問題を考える時に、即時反復の用法のみを問題にしているのは、問題の全容を歪めてしまうことにもなりかねない。

ここでは視点を変えて、「談話における情報の提示」と「話し手の視点」という角度からこの問題を考え、即時反復だけでなく、それ以外の指示形容詞の用法も含めて、一貫した説明が可能であることを示したい。

「談話における情報」という観点から分析するのは、指示形容詞は談話の流れのなかで情報をどのように提示するかという方略と密接な関係があるからである。ふつうフランス語の文法がこのような観点から語られることは残念ながら少ない。しかしこの点を示唆する非常に興味深いエピソードが、大賀正喜・G.メランベルジェ共著『和文仏訳のサスペンス』（白水社）のなかにある。和文仏訳の一例として、庄野潤三の『プールサイド小景』の次の一節をどのように仏訳するかが論議されている。「最初に友人に連れられてこのバアへ行った時、彼は姉の顔をフランス映画の女優で、現世的な容貌に彼岸的な空気を濃く漂わせているM...に似ていると思った。」提案された仏訳は次のような文である。

Quand, entraîné par un ami, il s'y rendit pour la première fois et la vit, il lui trouva une ressemblance avec M..., *cette actrice de cinéma française* dont le visage mondain s'aurolait d'un indubitable halo mystique.

この翻訳をめぐる議論の一部同書から引用する。

— 「フランス映画の女優」をメランベルジェ先生は、*cette actrice de cinéma française* としていらっしゃいますが、これはなぜ指示形容詞になっているのでしょうか。(中略)

M たとえば、定冠詞 *l'actrice de cinéma française* にすると、課題9「趙紫陽の訪米」で議論のあった *Victor Hugo, l'auteur des 《Misérables》* と同じことになりそうですね。皆さんご存じの、という意味が出てくる。指示形容詞の場合は、むしろ、聞き手は知らないんです。

大 アレッ、逆だと思っていた。つまり先生は、話し手だけが知っているという事で *cette* にされたんですか。

M そうなんです。話し手が自分の判断だけでそう言っているわけです。一般的にはそうじゃないかもしれない。(中略) 指示形容詞にすると話し手の主観になるんですよ。

大 ただ、*cette* に場合も、「ほら、あれだよ」というふうに、聞き手も知っているだろうと考えているんじゃないですか。

M そんなふうに聞こえるんですね。でも、「知っているだろう」なんです。実際は知らないんです。(p.246-7)

これは極めて示唆に富んだ発言である。指示形容詞 *ce* には、現場指示の用法があり、また「あの、例の」という意味でも用いられることがあるので、話し手と聞き手のあいだで了解されてことを表すと、普通は考えられている。メランベルジェ氏の発言はこの「常識」とは 180 度逆の趣旨の発言であり、指示形容詞を使うと話し手の主観を表現することになるというのである。この発言は、照応の問題を考えるときには、先行詞と照応形式の間で同一指示が成立するための、意味的・統語的条件だけを分析するのではなく、「談話における情報の提示」という問題を考察しなければならないということを示唆している。指示形容詞は本当にメランベルジェ氏の言うように、話し手の主観を表現するのだろうか。この問題を日本語における照応とも比較しながら考えてみたい。

1. 名詞句照応の分類と機能

名詞句照応には *un chien* → *le/ce chien* のように同一名詞句による忠実照応と、*un chien* → *l'/cet animal* のように異なる名詞句による非忠実照応とがある。忠実照応については上記論文に譲るとして、ここではまず非忠実照応を中心に考えてみたい。

MILNER(1982)は非忠実照応のうち定冠詞を用いるタイプを2つの型に分類している。第1は *Un bœuf paissait : le quadrupède...* のような型で、MILNER は「文脈照応」と呼ぶ。先行名詞句を N 1、照応名詞句を N 2 とすると、この型の照応では N 1 と N 2 の間に意味上の包含関係が必要である。上の例では <牛∈四足獣> のように、下位概念と上位概念の関係が成り立つことが照応成立の条件である。第2の型は次のようなタイプである。

(5) *Ton frère est arrivé hier ; l'époux de Jeanne avait manqué tous ses tirs.*

N 1 *ton frère* と N 2 *l'époux de Jeanne* の同一指示を保証するのは言語形式の上でも意味の上でも何もない。同一指示が成立するには *ton frère = l'époux de Jeanne* という言語外的知識が必要である。言い換えれば、「君の兄はジャンヌの夫である」ということが、話し手だけではなく、聞き手にも知られていることが必要なのである。この情報は先行文脈で明示的に与えられていることもあれば、誰でも知っている周知の情報とされることもある。MILNER はこの型の照応を「前提照応」と呼んでいる。

このように定冠詞を用いた照応の特徴は、N 1 と N 2 の間の意味上の包含関係や、言語外情報などの必要条件が存在するという点である。ところが指示形容詞による照応にはこのような制約が一切ない。

(6) *Ce chasseur est arrivé hier ; cet Allemand / *l'Allemand avait manqué tous ses tirs.*

(MILNER 1982)

(7) *Il était ravi, Antoine Riboud. Un nouveau titre, ça lui manquait! A force de répéter : « Je n'ai fait ni l'X ni l'Ena », cet ancien élève de l'Ecole supérieur de commerce de Paris n'en a collectionné qu'une bonne vingtaire.*

(6)では問題の猟師がドイツ人であることが先行文脈で示されなくても、また周知の事実でなくとも同一指示が成立する。この場合定冠詞による照応は不可能である。(7)ではアントワヌ・リブーは実業界の有名人であるが、彼がパリ高等商業学院の出身であるということは、一般読者に知られていることではない。にもかかわらずこの照応は成り立つのである。このように指示形容詞による照応には制約が一切ないという点が大きな特徴なのである。

CORBLIN(1987)は指示形容詞による照応は本質的に自由な照応であり、N 1 と N 2の間には何の制約もなく、ときには矛盾する名詞句であってもかまわないという。

(8) Il n'y a qu'une *fourchette*. Se servir de la soupe avec *cette cuiller* relevait véritablement de l'exploit. (CORBLIN 1987)

これは極端な例であるが、「フォーク」を「スプーン」と呼んでも同一指示は成立するのである。この照応を図式化するとN 1 →ce ()となるが、カッコにどんな名詞句を入れるかは原則として自由である。このように指示形容詞による照応には、2つの名詞句の間に強引に同一指示を成立させる力があるのである。

2. 指示形容詞による照応の特徴

では指示形容詞による照応は、なぜ語彙的な制限がなく、言語外的知識も必要としない原則的に自由な照応なのだろうか。それは <ce+名詞句> (以下 ceN)による照応は、単なる先行名詞句の反復や聞き手の知識に基づいた言い換えではなく、そこには話し手の視点からの判断作用が含まれているからである。次の例を見てみよう。

(9) Où est *ma fille* ? Où donc a passé *cette vermine*? (G.Schegade, *Le Voyage*)

この例では「うちの娘」が「寄生虫(殻潰し?)」と呼ばれているが、これは明らかに話し手である親の個人的な判断に基づいている。娘が以前から近所で寄生虫と呼ばれていたわけではなく、親が発話のこの時点で娘を寄生虫だと判断して、そう呼んでいるのである。定冠詞の *la vermine* による照応はここではできない。この事実を踏まえて本稿では ce N による照応の機能を次のように定義してみたい(3)。

『CE+名詞句は、先行文脈中の名詞句や文脈の内容を、文脈内の意味関係を含めて受け、それを対象として、発話主体の視点から、(再) 定義・性格づけ・判断・評価などを行なう機能がある』

le N による照応は単なる名詞句の反復や聞き手の知識に依存した言い換えであるのに対し、ce N による照応は話し手の主観に基づく判断を表すという点が、この2つの照応形式の根本的な違いである。ce N による照応は、2つの名詞句のテキスト上の近接性と話し手の判断のみに依存する自由な照応なのである。その結果としてしばしば、ce N は話し手の視点からの一方的な新しい情報の提示という性格を持つことに

なる。この仮説を支持する事実をいくつか見てみよう。

ce N はしばしば同格的に用いられることがある。この時、ce N は先行名詞句の意味を説明する用法で用いられることが多い。

- (10) Les zaibatsus, *ces conglomérats* dominant l'économie japonaise n'ont d'yeux que pour l'électrique, les machines-outils...
- (11) La Roumanie a découvert avec effroi les *camin spital*, *ces véritables mouiroirs*, généralement bâtis à l'écart des agglomérations...
- (12) Ils étaient partout, voyaient tout, entendaient tout. Ils : les hommes de la Securitate, *cette formidable machine* à broyer l'esprit de résistance des Roumains.

これらの例に共通しているのは、外国語の単語の説明に ce N が用いられているという点である。一般のフランス人は「ザイバツ」という日本語を知らない。ces conglomérats...以下の同格節は財閥の意味を教えている。(11)の *camin spital* はルーマニア語の単語で、(12)の Securitate はチャウシェスク体制の秘密警察のことである。どの例でも ce N の同格名詞句がなければ、これらの単語は一般のフランス人読者に理解されないおそれがある。この同格用法の図式は <N1 (未知の名詞句), ce N2 (N1 の説明)> と表せる。ここで重要なのは、ce N によって「新たな情報の提示」が行われているという点である。ce N は読者の知らない先行名詞句を説明している。ce N は談話の流れの中で単に先行名詞句を喚起するだけでなく、何か情報を付け加えるのである。

一般に同格用法では <N1, ce/le/o N2> のように、同格的に用いられる名詞句には、指示形容詞か定冠詞が付くか、または無冠詞の場合もある。興味深いことに限定詞の選択はこの用法の容認度に関係がある。上の(10)と(11)の限定詞を変えてフランス人にテストしてみると次のような結果が得られる。

- (13) a. Les Zaibatsus, les conglomérats dominant...
- b. Les Zaibatsus, conglomérats dominant...
- (14) a. ?les camin spital, les véritables mouiroirs...
- b. les camin spital, véritables mouiroirs...

(14)a.では限定詞を定冠詞に変えると容認度が低くなることが観察される。ところが(13)では限定詞を定冠詞にしてもそれほど容認度が下がらない。これは(13)の同格名詞句は客観的な言い換えであるのに対して、(14)ではより主観的・比喩的性格が強いためだと考えられる。聞き手にも共有されている知識から離れれば離れるほど、指示形容詞が要求されるのである(4)。

次の例は ce N のこのような機能を駆使した例である。

- (15) Les Bures arrivés a l'âge adulte n'ont plus que peu de dents bonnes. *La gadèbre* en est

cause. *Cette larve active se loge volontiers dans la racine d'une dent, l'insensibilise, la creuse, et d'une dent saine en deux mois fait une morte.*

(H.Michaux, *Voyage en Grande Garabagne*)

la gadèbre とは作者ミショーの考え出した想像上の生物であり、フランス語にこんな単語はない。ところが *cette larve active* という照応表現のおかげで、この「ガデブル」なるものが、歯に寄生する幼虫であることがたちどころに理解される。この例は *ce N* が話し手による情報の付与であることをよく示している。

3. 談話における情報の流れと照応

このように *ce N* による非忠実照応は、先行名詞句の単なる反復や聞き手に知識に基づく言い換えではなく、話し手の視点からの新たな情報の提示だと考えられる。これを談話における情報の流れという観点から見ると、*ce N* による照応は二重の機能を果たしていると言ってよい。指示形容詞 *ce* の指示機能によって先行名詞句との同一指示を確保すると同時に、照応名詞句によって新たな情報を提示し談話における情報の流れに寄与しているということになる。このことを日本語における照応と比較しながら見てみよう。

次の例は *ce N* の非忠実照応の典型的な例である。これをなるべく逐語訳的に日本語に訳してみよう。

(16) *Un arbre dressait ses branches tordues non loin de là. Il décida de passer la nuit près de ce compagnon.* (CORBLIN 1983)

(17) そこからほど遠からぬ所に一本の木がよじれた枝を広げていた。彼はこの道連れの傍らで夜を過ごすことにした。

理解は可能だが日本語としてはあまり適切な表現とは言えない。次のようにしたほうが自然であろう。

(18) ... 彼はこの木を道連れとしてその傍らで夜を過ごすことにした。

この例の示すように、日本語では語彙内容の異なる2つの名詞句の間に、指示詞 *ce* によって同一指示関係を立てることが難しいようである(5)。上の例では、「この道連れ」よりも、「この木を道連れとして」のように、照応名詞句が比喩的に用いられていることを「トシテ」で明示したほうがより自然である。これを無視すると、いかにも翻訳調の訳文になるか、悪くすると同じものをさしているのだということが読者に理解されなくなってしまう。

(20) *Au printemps de 1988, à l'approche de l'élection présidentielle, ses conseillers politiques lui recommandent de ne soutenir aucun candidat. Mais Tapis hésite, car à l'Elysée, on multiplie les clins d'oeil. Mitterrand a besoin de l'image de ce*

businessman qui a le coeur à gauche.

「1988年の大統領選挙が近づくと、彼の政治顧問はどの候補者も支持しないようにと進言した。しかしタピは迷っていた。というのはエリゼ宮はしきりに接触を求めてきたからである。ミッテランはこの左翼の心情を持つビジネスマンのイメージを必要としていたのだ。」

この例でも「左翼の心情を持つビジネスマンというタピのイメージ」としたほうが、日本語としては流れがよい。

フランス語の *ce N* による照応は、先行名詞句との同一指示を示すと同時に、新たな情報を提示するという二重の機能を果たしているのであるが、どうやら日本語のコノ *N* による照応にはこのような二重の機能を兼務する力がないようである。このために、フランス語の *ce N* の照応をそのまま逐語訳的に日本語に訳すと、そこに意味の上で何らかの飛躍があるように感じられてしまうのである。

この点を実証するために、実際の翻訳では *ce N* による非忠実照応がどのように日本語に訳されているかを見てみよう。フランス語の原文は *Catherine Arley : La femme de paille*、日本語訳は『わらの女』（創元推理文庫 安堂信也訳）である。いくつか典型的な例をあげる。

(20) *Réfléchissez une seconde et vous allez le voir. Je n'ai pas l'intention d'en faire état, je garde ce joker dans mon jeu au cas où vous en oublieriez les règles.*

ちょっとお考えになれば、すぐわかるはずだが。私は、必ずしもそれをあてにしているわけではありません。ただ、あなたがルールを忘れた時につかえるように、ジョーカーとしてとっておく。

(21) *Réfléchissez, ma petite mignonne. Ce secret restra entre nous.*

まあ、よく考えてごらん。これは二人だけの秘密にしておくんじや。

(22) *Il fallait penser et agir vite. Bientôt tous seraient au courant, dans cet univers étrangement clos et réduit.*

早く対策を考えなくては。そして、早く行動しなければならない。船は、ごく狭い、閉ざされた世界だ。事はたちまちみなに知れ渡るにちがいない。

(23) *Hilde réfléchit un instant à ce piège qu'il lui tendait, ayant l'air d'abonder dans son sens.*

ヒルデは、ちょっと考えた。これは、相手のさし出す罠ではないか、なにか意味深長な感じだ。

この例を見ると、フランス語の *ce N* による照応が、日本語では(20)の「ジョーカーとして」のように照応の比喩的性格を「トシテ」で明示しているか、(21)-(23)のように、「この～は *N* だ」と断定の形をとって訳されていることがわかる。

KLEIBER(1984)は、*ce N* はその背後に *c'est un (du) N* という述定構造を「前提」とするとい興味深い分析を示している。この分析は本稿で言う「話し手の視点からの判断」を「AはBである」というコピュラ文の形に明示したものであるが、この分析に

ならって言うならば、フランス語の *ce N* は *c'est un N* を前提として背後に隠しているのだが、日本語ではその背後に隠された「この～は *N* だ」という断定を、明示的に断定文として表現する方を好むという風に表現することができる。上に挙げた翻訳の例は、フランス語の *ce N* による照応が話し手の視点からの情報の提示であるという本稿の主張の直接の証明ではもちろんない。しかし、日本語と比較することによって、*ce N* による照応は単なる先行名詞句の反復・言い換えではなく、そこに何らかの話し手の側からの操作が介在していることを、間接的に示していると考えてよいだろう。フランス語の *ce N* はこのような話し手の操作を名詞句の形に圧縮して表現しているのである。

フランス語でもこのような照応は日常会話では用いられず、書き言葉、特に新聞や雑誌などのジャーナリズムの文体で好んで用いられるという事実は注目されてよい。*ce N* は話し手の立場からの判断を、名詞句の形に圧縮して提示することができるので、ジャーナリズムのように、文体の簡潔さと読者に与えるイパクトを重視する文体に適しているのである。

このような照応がフランス語でも話し言葉では見られないのは、次のような理由によると思われる。*ce N* による非忠実照応には、すでに述べたように、先行名詞句への照応と、新たな情報の提示という二重の機能がある。ところが一般に話し言葉の文法では、1つの言語形式が複数の機能を兼務することを嫌い、1つの形式には1つの機能を当てるといふ、語用論的透明性を好む傾向が観察される(6)。このために話し手の判断を名詞句の形に圧縮する不透明なこの照応形式を忌避するのだと考えられる。

日本語でこのような照応がしばしば不自然と感じられるのもこのためであろう。どうやら日本語には、『聞き手の知らない新たな情報を提示する場合には、できる限り明示的に行わなくてはならない』という語用論的原則が存在するようである。これは次のような場合にも観察できることである。

(24) A: セパタクローというのは (*セパタクローは) 何ですか。

B: セパタクローというのは(*セパタクローは)、タイの伝統的な競技です。

日本語では自分が知らない名詞句や、相手が知らないと思われる名詞句を新たに提示するときには、「トイウノハ」や「ッテ」などの接辞を名詞句に付けなければならないという規則がある(7)。この規則も上に述べた情報の明示的提示という日本語の談話情報の流れに関する一般原則の一部であると考えることができる。日本語とフランス語のあいだには、このように談話における情報の流れという点で、有意な違いが存在するようである。今までの言語学ではこのような問題はほとんど扱われて来なかったと言っても過言ではない。近年になって KAMIO(1979)、田窪(1984)、金水(1988)などの研究によって、この問題がよく知られるようになってきた。「談話における情報の流れ」という観点からさらに研究をすれば、この分野における知見も深まるものと思われる。

4. 後方照応と「周知」の CE

さて、指示形容詞 *ce* にはこれまで扱った前方照応以外に、後方照応の用法と、「周知の CE」と呼ばれる用法がある。次例が後方照応の用法である。

(25) [未熟児について] *Ses yeux surtout sont en danger : ils risquent cette maladie grave qu'est la fibroplasie rétrodentale.*

(26) [同上] *C'est avec précaution qu'il faut les [=les prématurés] soumettre à l'attaque de cette substance ultradangereuse : l'oxygène.*

これらの例では *ce N* は先行名詞句をさすのではなく、あとに続く名詞句を予告するので、後方照応的な *ce* と呼ばれる。

周知の CE と呼ばれているのは、次のような例である。

(27) *C'est une femme longue, sèche, vigoureuse, une de ces femmes blondes qui pourraient aussi bien être brunes.* (F.Sagan : *La chamade*)

(28) [全国一斉学力テストについて]

Pourtant, certaines questions vont nettement plus loin qu'une simple évaluation des connaissances, et s'apparentent à ces tests de quotient intellectuel qui ont si mauvaise réputation.

周知の *ce* は関係節を伴い、しばしば *un(e) de ces...* という形を取る。この用法が「周知の *ce*」(*ce de notoriété*) と呼ばれているのは、前方照応でもなく、かと言って後方照応でもなく、しばしば「誰もが知っているあの...」というニュアンスで用いられることがあるからである。

しかし、後方照応の *ce* の周知の *ce* の境界線はそれほどはっきりしているわけではない。例えば次の例はどちらのケースになるかは微妙である。

(29) [N. Avril の新作の書評] *Sans croire, un peu naïvement, à une littérature thérapeutique, le lecteur attentif a envie de deviner, entre un texte et son auteur, ce pacte secret, cette part de risque et d'impudeur sans quoi aucun récit ne trouve le chemin de notre cœur.*

(30) [同上] *Elle a su trouver le ton juste de cet aveu littéraire qui ne révèle pas une faute, mais une souffrance en général refoulée jusqu'à créer ce malaise, cette semi-culpabilité, ces élans bridés, ces colères étouffées d'où naît la volonté d'écrire.*

これらの例は、(26)のようにうしろに指示する名詞句のある純粋な後方照応ではない。かといって「周知」という名称が意味するような、誰もが知っている事柄というにはあまりに特殊な言明であり、限りなく話し手の個人的な意見に近い。

春木(1990)はフランス語の周知の指示形容詞の用法を詳細に論じて次のように述べている。この用法では、関係節の記述によって1つの概念が形成され、それが *ce N* と

結びついてサブクラスが作り出される。この結果、その指示対象となるサブクラスについての知識が、共発話者（聞き手）の言語外知識・記憶の中になくとも、関係節の内容を通して指示対象が鏡像的に作り出されるという、一種の自己指示を通して、自己充足あるいは疑似同定が行われ、そこに周知の効果が生まれるというのである。

しかし、本稿の主張するように、**ce** には先行名詞句との同一指示を示す機能と、話し手の視点からの新たな情報の提示という、二重の機能があるという観点に立てば、いわゆる周知の **ce** の生み出す意味効果を、前方照応や後方照応の用法と連続的に説明することができるのではないだろうか。

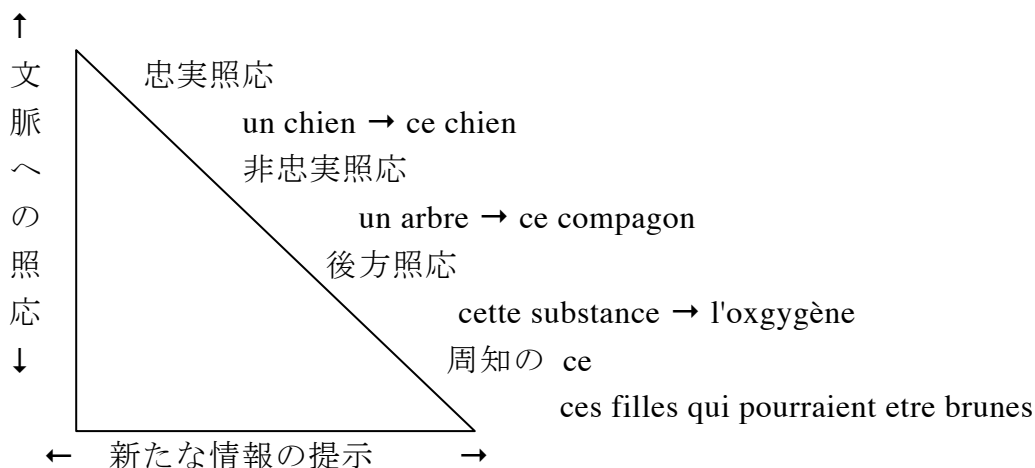
まず **un chien** → **ce chien** のような単純な前方照応では、**ce** には同一指示という第1の機能しかない。**ce** は「文脈中に照応先を探せ」という指令であり、先行文脈に該当する名詞句を発見することで、この指令は実行される。**un arbre** → **ce compagnon** のような非忠実照応では、この第1の機能に加えて、話し手の視点からの情報の提示という第2の機能が発動している。(26)の **cette substance : l'oxygène** のような純粋な後方照応の場合も本質的にはこれと同じである。ただし、**ce** は必ずしも先行文脈だけではなく、「前後のまわりの文脈」に指示対象があるということを示す指令なので、先行文脈に該当する対象がなければ、後続文脈に候補を探すことになる。話し手の立場からの情報の提示という性格は、後方照応の場合、前方照応よりも強くなるのは当然である。

いわゆる周知の **ce** もこの連続上にあると考えられる。周知の **ce** は、その名称とほらはらに、『話し手の側からの一方的な情報の提示』だと考えるべきである。「周知」という名前が前提とするような、大多数が共有している知識は実は必要なものではない。ただし、周知の **ce** の場合、本来あるべき照応先がどこにもないという特殊な事情がある。照応先は本来、発話の現場か前後の文脈にあるべきものなのだが、周知の **ce** の場合これがないので、聞き手の「認知空間」に照応先が「仮構的」に構築され、このために春木の言う「鏡像的」照応が起きると説明することができる。言い換えれば、周知の **ce** には本来の意味での文脈への照応機能はなく、新たな情報の提示という第2の機能が前面に出ていると見なすことができる。

このように、<CE+名詞句> による照応形式の機能を、

- (A) 前方あるいは後方の文脈への照応
- (B) 話し手の視点からの新たな情報の提示

の2つの機能が、異なる比重で重合していると考えれば、すべての **ce** の用法を連続的なスケールを用いることで、一貫して記述することができるのではないだろうか。試みに図式的に表現すると次のようになる。



忠実照応では文脈への照応の値が最大で、新たな情報の提示はゼロである。非忠実照応では文脈への照応に加えて、新たな情報の提示が行われている。後方照応では照応機能の値は低下して、情報の提示のウエイトが大きくなる。そして「周知の ce」では本来の照応機能はなくなって、情報の提示が前面に出て来ると考えられる。

いわゆる「周知の ce」は決して指示形容詞の用法のなかでは特殊なものではなく、むしろ<ce+名詞句> という照応形式が本来持っている機能を極限まで発揮した用法であると言えるのである。

5. おわりに

フランス語の ce N による照応の機能を、主に「話し手からの情報の提示」と「談話における情報の流れ」という観点から考察してきた。そのなかで明らかになったことは、un chien→ce chien のような、いわゆる忠実照応だけを見ている限り、un chien→le chien の le N 照応と差がないように見えるが、実はこの2つの照応形式には根本的な違いがあるということである。ce N には文脈中の名詞句 (または文脈内容) を取り立てて、話し手の視点から新たに提示するという le N にはない機能がある。この意味で KLEIBER のように、ce N には話し手の判断が内包されていると表現することも可能なのである。

この点は Zaibatsus, ces conglomerats dominant l'économie japonaise 「日本経済を支配しているザイバツという企業複合体」のように、聞き手 (読者) が知らないと思われる単語を受ける ce N の同格用法の場合は、最もはっきりしている。話し手だけが持っている (と見なしている) 情報を提示するこのような ce N は、話し手からの一方的な情報の付与なのである。

しかし、この性格は他の ce N の用法にも、程度の差はあれ存在していると考えられる。ma fille 「うちの娘」→ cette vermine 「この寄生虫」のようなケースでも、言わば話し手は聞き手に対して、自分の判断を一方的に押し付けているわけである。いわゆる「周知の ce」の用法においても、この「周知」と呼ばれている意味効果は見せ掛けにすぎない。話し手は ce の照応先を聞き手の認知空間に疑似的に設定し、その実自分の視点からの判断を一方的に提示しているのである。

指示形容詞 ce は発話の現場にあるものや、すでに先行文脈に登場したものをさす

用法があるために、一般に話し手と聞き手の双方の目の前にあるものや、一度登場して双方にとって了解済みのものをさすと考えられている。しかし、本稿の初めにあげたメランベルジェ氏の「指示形容詞の場合は、むしろ聞き手は知らないんです。指示形容詞にすると話し手の主観になるんですよ。」という発言は、同格に置かれた *ce N* という限られた用法についてであるとはいえ、*ce N* の特性を鋭く指摘しているのである。

本稿の最後でもう一度強調しておきたいのは、照応を通じての情報の提示の方法において、フランス語と日本語には大きな違いがあるという点である。

(31) [テニスプレイヤーの Michael Chang について]

Après sa victoire, *cet être extraordinairement calme* qui semble venir, comme le Petit Prince, d'une autre planète, a remercié Jesus-Christ et prié pour le peuple chinois.

このような場合日本語では、「星の王子様のように別の星が来たかに見えるこのとても物静かな男は、勝利の後でキリストに感謝し...」とするのにはいかにも無理がある。日本語ではこのように名詞句の形に畳み込んだ情報の提示は不自然さを免れないので、「チャンは星の王子様よろしく別の星からやって来たようなとても物静かな青年で...」とでもしなければ、とても文章にならない。このような「談話における情報の提示の方略」という研究は緒についたばかりなので、今後研究が進めば日本語とフランス語の違いをこのような観点から解明することが可能になるだろう。

[注]

本稿は 1990 年 3 月 19 日に大阪大学で開かれた「指示と語用論」をテーマとするシンポジウムでの口頭発表をさらに発展させたものである。シンポジウムの席上貴重な意見をいただいた諸氏に感謝したい。

(1) 本稿で用いる*記号は、その例文がフランス語として容認されない非文であることを、??記号は極めて容認度の低い文であることを示す。また本稿の例文のうち、本文中に出典を示しているもの以外は、新聞 *Le Monde*、雑誌 *Le Figaro Magazine* から採取したものか、筆者の作例である。

(2) この点は既に春木(1986)が指摘している。(3) 三藤(1989)は、G.Fauconnier のメンタル・スペース理論の立場から、指示代名詞の *ce* について、「話し手の側からの本質的な情報の《与え直し》を表す (これには、話し手の個人的な評価・(再)定義・注釈などが含まれる」(p.62)と述べている。この考え方は本稿の立場と極めて近く、本稿も示唆されるところが大きかった。一方、田口(1991)は「物語」という観点から、*ce* は話者の介入のマーカであるとして主張しており、これは本稿の立場と基本的には同じである。本稿に新味があるとするれば、それは「談話情報の流れ」という問題と関連して考察した点と、いわゆる「周知の *ce*」を含む *ce* のすべての用法を統一的に理解しようと試みた点である。

(4) この点で興味深いのは用例(14)b の示すように、無冠詞でも容認度は指示形容詞の場合と同じくらいよいという点である。このことは無冠詞名詞句も新しい情報の提示

の手段であるということの意味するが、これは無冠詞名詞句の性質を考えるとさして驚くにはあたらない。むしろ指示形容詞と無冠詞が同じ振る舞いを示すということの方がおもしろい現象でこの点はさらに研究の余地があるが、本稿ではこれを示唆するにとどめる。

(5) 日本語でこれがまったく不可能だと言っているのではない。「生命、この神秘」のように2つの名詞句が隣接しているときには可能なようである。しかし、2つの名詞句の距離が離れるにつれて不自然に感じられる。一方フランス語では2つの名詞句の距離がある程度離れてもこのような照応ができる。

(6) この点は会話フランス語における関係代名詞の用法などにも見られる。例えば *l'homme dont je parle* をしばしば *l'homme que j'en parle* と言うことがあるのは、*dont* の兼務している従属節のマーカと格関係の表示とを *que* と *en* に分離して、機能の重合を避けようという傾向の現れと解釈できる。

(7) この問題は田窪(1984)で詳しく論じられている。

[参考文献]

Corblin, F. (1983) : «Défini et démonstratif dans la reprise immédiate», *Le français moderne* 51, pp.118-134

Corblin, F. (1987) : *Indéfini, défini et démonstratif*, Droz

春木仁孝(1986) : 「指示形容詞を用いた前方照応について」 『フランス語学研究』 20号、 pp.16-32

春木仁孝(1990) : 「現代フランス語の周知の指示形容詞について」、『言語文化研究』 16号、大阪大学言語文化部

井本秀剛(1989) : 「le N と ce N による忠実照応」 『フランス語学研究』 23号、 pp.25-39

KAMIO, A. (1979) : "On the Notion Speaker's Ter iroty of Information : a function analysis of certain sentence-final forms in Japanese", Bedell et al. (ed) *Explorations in Linguistics*, Tokyo

金水敏(1988) : 「日本語における心的空間と名詞句の指示について」、『談話・意味・語用論』 科学研究費報告書

Kleiber, G. (1984) : «Sur la sémantique des descriptions démonstratives», *Linguisticae Investigationes* 8, pp.63-85

Milner, J.-Cl. (1982) : «Anaphore nominale et pronominale», *Ordres et raisons de langue*, Seuil, pp. 18-30

三藤博 (1989) : 「フランス語における *c'est /il est, ce N/le N* の対比について」、『フランス語学研究』 23号 pp.60-66

小野正敦(1985) : 「照応に関する一考察」、『フランス語学の諸問題』 pp.204-219

田口紀子(1991) : 「フランス語における名詞句の反復 - 語り手と物語りの視点から」、『ロマンス語研究』 24号

田窪行則 (1984) : 「知っていることと知らないこと - 対照語用論の試み」、『日本認知学会発表論文集』 I、 pp.1-14